



【取組4-6】大学のゼミやボランティアセンターとの連携

運営受託:(公財)横浜市国際交流協会

テーマ	【取組7-2】子どもの日本語教室「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」への大学生サポーター参加
日時・場所	<p>①「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」サポーター向け研修 ーサポーターオリエンテーションー 日時：7月9日(水)17時～18時 または 7月11日(金)13時～14時 場所：オンライン</p> <p>②子どもの日本語教室「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」 日時：【コース1】2025年7月29日(火)・30日(水)・31日(木) 【コース2】2025年8月20日(水)・21日(木)・22日(金) 10:00～12:00 場所：なか区民活動センター・なか国際交流ラウンジ</p> <p>※子どもの日本語教室については【取組7-2】なつやすみこどもにほんごきょうしつの事業報告を参照ください</p>
参加人数	主に市内大学に通う大学生 13人

【事業概要・趣旨】

実態調査等において、日本語学習ニーズの拡大に伴い、地域日本語教室では、日本語学習支援の担い手の育成・確保が課題となっている。本事業では大学と連携し、学生の日本語教室への参画など、地域日本語教育への理解と担い手の育成が進むよう働きかけていく。

今年度は、主に市内大学の多文化共生・日本語教育専攻等のゼミやボランティアセンターと連携し、大学生に国際交流ラウンジ(*)で実施する「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」のサポーターとして参加してもらう。

*国際交流ラウンジ：市内在住の外国人のための生活情報提供、多言語相談、日本語教室の開催、通訳ボランティアの派遣、日本人との交流活動などを行う多文化共生の拠点。市内13区に設置されている。




【目的・目標】

大学生がサポーターとして「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」へ参加し、外国につながる子どもの日本語学習支援の場を知る機会とする。

(【取組7-2】なつやすみこどもにほんごきょうしつの目標より)



【取組4-6】連携:大学のゼミやボランティアセンターとの連携

運営受託:(公財)横浜市国際交流協会 

【実施した事業プログラム内容】

①「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」サポーター向け研修

教室での日本語学習サポートのため、外国につながる子どもの状況、やさしい日本語を含むコミュニケーション方法、個人情報取り扱い等についての事前研修をオンラインにて実施。

②子どもの日本語教室「なつやすみこどもにほんごきょうしつ」

大学生が教室に日本語学習サポーターとして参加。子ども1~2名に対し、サポーター1名が活動できる形式とした。※教室の内容は【取組7-2】なつやすみこどもにほんごきょうしつの事業報告を参照ください

【成果】

- 主として横浜市内2大学の教員やボランティアセンタースタッフを通じて大学生への広報を行った。参加日数が少なくても応募できるよう参加のハードルを下げての募集だったが、想定よりも多くの大学生サポーター応募があり、外国につながる子どもの教室への関心の高さがうかがえた。
- 事前にオリエンテーション研修を実施したこと、また、教室では講師が進行し、サポーターが1~2名の子どもと会話等をする形式にしたことで、初めてでも安心して参加することができたという学生からの声を大学を通してもらっており、ボランティア活動に参加するハードルを下げつつ、安心して参加できる環境を提供することができた。

◀教室に参加したことでの大学生の気づきや意識の変化(アンケートより)▶

- 「やさしい日本語がどのようなものなのか、経験したからこそ気づくことができました。分かりやすく教えることの難しさに気がついた。」
- 「一人ひとりの子どもの様子、意思、背景などを知り、大切にした上で活動することの重要性を感じた。」
- 「日常生活でも、知らないこと、やったことがないからといってイメージで決めつけてしまっていたということに気づき、考えさせられる機会となった。」
- 「日本語を教える対象である前に小さい子どもたちであることを忘れてはいけないと思った。」
- 「大学での学びや留学生サポートに活かしたい。」

【今後の展望】

- 本取組は、地域日本語教室での日本語学習支援の担い手の育成・確保という観点からはじまり、目標にも「日本語学習支援の場を知る機会とする」と掲げていたが、教室への参加による大学生の気づきや意識の変化からは、「知る機会」以上に、多文化共生への学びを深められる機会であったことがわかる。また、本取組での連携をきっかけに、市内1大学と横浜市国際交流協会(YOKE)との包括連携協定締結に至り、国際交流・多文化共生に係る事業での連携・取組を通じた大学生の能力育成、実践的な学術研究の機会が期待されている。このことから、本取組では、教室参加等のフィールドワークでの学びを通じた、大学生の“グローバル人材育成”という視点も加え、事業を展開していく。
- 今回の教室参加においては、参加する大学生の負担を考慮したが、今後はより主体的に活動に関われるようなプログラム内容を検討したい。